

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 19世紀ウィーンの近代市民階層と読書文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山之内, 克子, Yamanouchi, Yoshiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1623">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1623</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 19世紀ウィーンの近代市民階層と読書文化

山之内 克 子

## 1. はじめに — 近代市民階層と「読書」

1980年代、ドイツやオーストリアにおいて着手された近代市民研究は、「近代市民」という、法的、経済的にも文化的にも、一意的な定義を下すことが極めて困難な社会グループの本質を明らかにしようとする試みであった。「市民」に関する様々な研究プロジェクトが発足し、彼らの政治的権利から生活文化に至るまで、多様な局面からのアプローチが試みられた。<sup>(1)</sup>

いうまでもなく、近代市民とは、18世紀、啓蒙主義思想の広まりや、ヨーロッパ各地で進められた国家行政・産業経済の合理化・近代化にともなって、教会や貴族等の旧支配階層に対抗する形で、次第にその社会的・経済的地位を上昇させた、新しいタイプのエリートにほかならない。そして、社会構造そのものは、旧体制が依然として保持されていた18世紀に、しかも、中世の都市市民のような確固とした身分的、法的な拠り所を持たない新興のグループが、確実に社会的影響力を手にし得た背景に、読書文化が深く関わっていたことは、20年に及ぶ市民研究のプロセスの中で、しばしば指摘されてきた。例えば、オットー・ダン (Otto Dann) は、「伝統的な口承文化に対して活字文化を発展させることによってこそ、市民たちはヨーロッパ社会の近代化を実現することができた」と説明し、近代市民階層を「読書する階層」と呼んだのである。<sup>(2)</sup>

18世紀、それまでラテン語とスコラ学によって支配されていた書物の世界

は、市民たちによって一新された。彼らは、世俗語による哲学書や文芸書が伝える知識をもとに、伝統的なキリスト教教義や封建的秩序に代わって、近代的な学問、科学の価値を重んじる、新しい世界観を構築したのである。書物と読書を通じて、市民たちは、自らのアイデンティティに関わるような、共通の思考・行動様式、マナー、慣習、さらには政治的理想をも形成することができた。文学史家、ヨッヘン・シュルテ＝サッセ (Jochen Schulte-Sasse) が、啓蒙期における書物を「市民的規範の媒体 (die bürgerliche Normenvermittlungsinstitution)」と呼んだのは、まさにこの意味においてである。<sup>(3)</sup>

しかも、18世紀市民階層の読書とは、単に個人的な慣習ではなく、まさに社会的行動であった。個々の読者、さらに、読者と作者の間には、新聞や読書クラブ等、様々な「公共的機関」を通じて、高度なコミュニケーション回路が確立されていたのである。ユルゲン・ハーバマス (Jürgen Habermas) が「文芸的公共性 (die literarische Öffentlichkeit)」として定義づけたように、<sup>(4)</sup> 啓蒙期の「読書」とは、きわめて社会的な行為であり、「読書すること」は、まさに社会的解放と市民社会確立のプロセスへの参加を意味していた。

読者の「能動性」、作者と読者との相互作用、さらに読書そのものの公的性格によって特色づけられた「文芸的公共性」は、しかし、きわめて短期間のうちに消滅する運命にあった。18世紀末から19世紀初頭にかけて、印刷技術の進歩、貸本屋や文庫本の普及によって「書物」が著しく大衆化され、その内容も多様化するなかで、読者はもはや「市民社会の確立」という共通の政治的・倫理的目的をもった一種の利益集団ではあり得なくなったのである。<sup>(5)</sup> ロルフ・エンゲルジング (Rolf Engelsing) が挙げる、「読者層の拡大」についての余りに誇張されたデータに関しては慎重に扱う必要があるが、<sup>(6)</sup> 19世紀に入って、「読書」という行為が、啓蒙期のように、もはや必ずしも市民的行動として位置付けられなくなっていたことに、疑問の余地はない。

本論文における最初の問題設定は、読書という習慣が次第に特定の社会層

との繋がりを失い、普遍的な習慣へと変化し始めた19世紀という時代に、かつては読者層の大部分を占めていた市民階層の読書スタイルにどのような変化が生じたのか、という問いである。ドイツ語圏の貸本屋に関して体系的な研究を行った文学史家、アルベルト・マルティノー (Alberto Martino) は、19世紀、貸本屋の顧客層が、家事使用人や徒弟から下級貴族に至るまで、雑多な社会層によって構成されていたとした上で、「この時代、すべての読者層が、貸本屋が提供する同一のレパートリーの読み物に満足していたのであり、社会層による読書傾向の違いなどは、すでに見られなくなっていた」と断言している<sup>(7)</sup>。しかし、まさに「ブルジョアの時代」と呼ばれる19世紀、音楽から絵画、建築に至るまで、あらゆる分野でブルジョア的・市民的なカテゴリーが成立する中で、文芸や読書文化において、例外的に市民たちが何らの文化的アピールも行わなかったというような想定が、果たして可能であろうか。読者層が拡大し、哲学書から娯楽読み物まで、「書物」の幅も著しく広がったとき、マルティノーが指摘するような「読者層の均質化」ではなく、むしろ、その細分化が起こったのではないか。質の悪い娯楽小説が大量生産され、書籍市場の動向を左右する一方で、ある種の文化的理想に頑なにこだわる読者層が存在したのではないか。ここでは、このような仮説に基づいて、19世紀後半にウィーン市民が所有した私蔵書の中に、取えて「市民の」読書文化を読み取っていききたい。

## 2. 研究対象としての私蔵書

「読書」や「読者」に関して歴史的アプローチを試みる目的で、史料として私蔵書を取り上げる際の問題点は、研究史上、すでに指摘されている。その最大のネックは、いうまでもなく、私蔵書においては、これらの本が実際にその所有者によって「読まれた」か否かが、今日もはや判定不可能であるという点にある<sup>(8)</sup>。しかし、ドイツ、オーストリアにおける市民史研究がこれ

まで明らかにしてきた、市民社会における「文化」の諸局面は、このようなリスクを考慮してもなお、市民の私蔵書が史料としてもつ大きな可能性を示唆している。

ユルゲン・コッカ (Jürgen Kocka) は、近代市民階層を、「身分でも階級でもなく、ひとつの文化」として定義した<sup>(9)</sup>。すなわち、市民階層への帰属を決定したものは、職業や経済状況、法的権利よりも、むしろ、ある特定の文化に対する受容能力にほかならなかった。市民階層は、指摘するまでもなく、もともと旧支配階層に対する対抗勢力として現われた。したがって、彼らのアイデンティティの本質は、自らを「貴族から差別化すること」にあり、貴族の伝統文化から離れた独自の文化的コードの確立は、彼らの存在そのものを支えていた<sup>(10)</sup>。したがって、市民たちは、常に、自らが独自の「市民的」文化の支持者であり、受容者であることを誇示して自己確認を行う必要があった。文化の諸局面において、彼らが、常に他者から「見られること」を意識し、「立派な風采 (Repräsentation)」を重んじたことは、こうした関連で理解すべき現象である<sup>(11)</sup>。

そして、19世紀、ウィーンでも営利目的の貸本屋が乱立し、誰もがわずかの出費で様々な読み物を手にすることができた時代に、市民たちの間になお多くの私蔵書が見出される事実は、これらの私蔵書、あるいは図書を所有するという行為そのものを、「市民階層」を特色付けた「文化的実践 (die kulturelle Praxis)」の一形態とみなす視点を可能にする。「モノ」としての「書物」は、常にそれが内包する概念の象徴としてみられてきた。そして、「立派な風采」を重んじた19世紀の市民にとって、図書コレクションが、彼ら自身の知識や教養に関する理想系を最も明快な形で具現化・視覚化する手段であったことは、ほぼ間違いない。書庫やサロンに収められた私蔵書は、歴史的成本に身を包んだ家族の肖像と同様、その所有者にとって、例えばサロンの客など、他者に対すると同時に、自己に対してもまた、自らが「市民的教養」の支持者であり、これを受容する能力があることを確認する

ための、重要な手段だったのではないか。だとすれば、私蔵書の分析によって明らかになるスタンダード・ワークや人気作家、あるいは特定の傾向を、われわれは、当時の市民社会が「教養ある市民」に相応しいと考えた読書趣味そのものとしてみなすことができるだろう。蔵書家たちは、まさにこれらの私蔵書を通じて、専ら貸本屋から犯罪小説を借り出すだけの読者層と自らとの間に閥を引き、それによって自身の「文化的ステータス」を確認していたに違いない。たとえ彼らが滅多にそのページを繰ることがなかったにせよ、これらの私蔵書は、市民階層の本質に関わる、「文化 (Kultur, Habitus)」の一局面に光を当てるための契機となるのではないか。

### 3. 私蔵書カタログに関する数量的アプローチ

以上のような問題設定にしたがって、市民階層の私蔵書の構成内容について歴史的考察を試みるために、まず、分析史料として私蔵書の競売カタログを取り上げる。書籍の金銭的価値を中心に構成された遺産目録等に比べ、これらのカタログは、蔵書の構成内容についてより詳細な情報を提供するからである。さらに、ある程度均質な分析ベースを確保し、作業をできるだけ客観的に進めるために、ウィーン市内の3つの公立図書館（オーストリア国立図書館、ウィーン市立図書館、ウィーン大学図書館）に現存する19世紀の競売カタログ約80件を対象に、一定の条件下で絞り込みを行い、10件のサンプルを抽出した。<sup>(12)</sup> これらのサンプルをデータ・ベース化し、ここに割り出されたスタンダード・ワーク、人気作家、重点的に収集された分野などから、まず、市民の文化的理想を読み取ることにする。もちろん、ここでは、時間的・空間的制約から、十分な数の母集団が得られず、したがって、サンプルの抽出作業も、厳密な統計学的価値を持つものとはなり得なかった。サンプルの分析結果については、これを一般的定式とするのではなく、むしろ、典型的市民がもった読書スタイルの一例としてとらえ、<sup>(14)</sup> これを市民的読書に関する

アプローチの足がかりとしていきたい。

### (1) 蔵書の規模と構成

選別された10件のカタログの内容について詳しい分析を始める前に、市民の私蔵書の規模や構成内容に関する「平均像」を明らかにすることで、18世紀から19世紀にかけての図書所有習慣の変遷プロセスを確認しておきたい。

まず、所有者が市民階層に属すると判断された63件の私蔵書のうち、蔵書の総数が確認できる33件を、その規模によって分類してみると、総冊数1,000から5,000の、中規模の蔵書が19件確認されたのに対し、10,000冊を超える大規模なコレクションは6件で、むしろ少数派となっていた。

こうした傾向は、啓蒙期における私蔵書の伝統と鮮やかなコントラストをなすものである。例えば、パウル・ラーベ (Paul Raabe) による、ドイツ啓蒙期における知的市民階層の私蔵書についての研究は、当時、15,000冊を超える蔵書が決して例外ではなかった事実を確認した上で、これらの私蔵書の平均規模を約10,000冊と見積もった。<sup>(15)</sup>したがって、プロテスタント・ドイツとカトリック・オーストリアとの地域的差異を考慮してもなお、18世紀から19世紀にかけて、蔵書規模の縮小が起きたことは、容易に推論できよう。

こうした現象の背景として、丁度この時期、書籍市場と学問の世界で大きな変化が起きたことを看過してはならない。まず、18世紀以前の蔵書家では、書籍市場に出回るすべての新刊書をフォローするのが慣例であった。ところが、18世紀半ば以降、書籍市場が著しく拡大し、年間出版件数が急増すると、個人的にこれらのすべてを把握し、購入することは次第に困難になっていった。<sup>(16)</sup>

しかし、蔵書家が、必ずしも市場が提供するすべての書物を所有しなくなったことの原因は、書籍市場の拡大という、物理的な問題にとどまるものではなかった。19世紀にかけて、知識や学問の理想もまた大きく変化しつつあった。すなわち、これまで理想とされてきた普遍主義的な知識のあり方に代わっ

て、専門主義的な概念が支配的となり、知識人たちの間では、従来の文献学的・百科全書的知識ではなく、専門的知識が求められた。<sup>(17)</sup>

そして、この変化は、蔵書の規模だけではなく、その構成内容にも確実に影響を与えた。ウィーンに現存する、閲覧可能な19世紀の蔵書競売カタログすべてについて、カタログの分類法と実際の蔵書の構成内容に着目するとき、普遍主義的な教養理想の終焉と学問の専門分化の傾向は、歴然としたものになる。

まず、カタログの分類法に関していえば、18世紀には、いわゆる「フランス式分類法（神学、法学、科学および芸術、文学、歴史の5分類）<sup>(18)</sup>」や、ドイツに普及した、大学の学科分類に従った分類法（哲学、神学、法学、医学の4分類<sup>(19)</sup>）のように、ある程度の拘束力をもった分類システムが存在した。これに対して、ここで取り上げた分析対象においては、各々のカタログがそれぞれ独自の分類法を採り、そこには統一的な分類基準があるとも思われない。<sup>(20)</sup> こうした傾向は、まさに、古典古代以来、ヨーロッパの学問世界を支配した共通の規範や枠組が、19世紀になって、急激に力を失っていった過程を示唆するものであろう。

さらに、蔵書の構成内容についてみるなら、啓蒙期に理想とされた、あらゆる専門分野のスタンダード・ワークを網羅する普遍主義的な蔵書（die Universalbibliothek）は、殆ど確認できなかった。また、10件の分析サンプルについても、絞り込みの段階で純粹の専門図書コレクションを除外したにも拘わらず、ここには、18世紀以来の伝統であった普遍主義的傾向は殆ど見られない。分類法上はかろうじて普遍主義を踏襲しているカタログでさえ、特定の項目において、1%未満、または40%以上という著しい偏りを見せている。<sup>(21)</sup>

ここで注目されるのは、とりわけ、法学、自然科学、神学の分野が激しい落ち込みを見せていることである。そして、このこと背景には、当時の市民社会、とりわけ教養市民層において、これらの分野での専門教育課程が著



しく組織化・体系化され、弁護士、医者、技師等、この諸領域での専門知識をもつ人々が、急激にその社会的・経済的地位を上昇させていたという事実があった。<sup>(22)</sup>蔵書家の関心の減少は、法学や自然科学、神学が、その専門分化が進行するにしたがって、普遍教育的知識としての価値を低下させていたことを裏付けるものにほかならない。

一方、これらの私蔵書の中で中心的な位置を占めた分野は、文学と歴史であった。10件のサンプルのいずれにおいても、この二分野が蔵書の主要部分を形成しており、また、その他のカタログにおいても、文学作品と歴史書のみを集めた蔵書が数多く確認された。<sup>(23)</sup>古典的教養理想の枠組の中では、補助学問に過ぎなかった文学や歴史に、普遍的教養の基礎としての意義を見いだそうとする傾向は、改めて指摘するまでもなく、後期啓蒙主義に起源をもつものである。では、この傾向が、19世紀の私蔵書の構成の中に、いかなる形で継承されたのか。この問題を、さらにサンプルの細かい分析を通じて明らかにしていきたい。

いずれにしても、19世紀においては、啓蒙期の知的市民層に見られた、膨大かつ、内容的にバランスのとれた普遍主義的な私蔵書の構成は、殆ど消滅していた。どの蔵書においても、ある程度の専門分化の傾向がみられ、それぞれが強烈な個性をもち、18世紀の百科全書の教養理想のような、すべての蔵書に共通する特色は、もはや認め難いものになっていた。

10件のカタログに関する内容分析に際しては、こうした多様化、細分化の傾向を十分に考慮することが必要である。

## (2) カタログの分析

データ・ベース化された10件のサンプルから「共通項」を割り出す作業の中で、10人の蔵書家のうち半数が所有した作品は、その総数でわずか20件にすぎないことが確認された。<sup>(24)</sup>知識と学問の専門分化が著しく進行した状況を考慮するとき、ここで特定のスタンダード・ワークが見いだされなかったこ

とは、当然の結果といえるだろう。18世紀の知的市民層に関して、その蔵書が欠くことのできなかつたスタンダード・ワークが確認されているのに対し、<sup>(25)</sup> 19世紀には、特定の作品が読者の間にそのような拘束性を持つ現象はすでにみられなくなっていた。

そこで、次に、選別されたサンプルの半数以上に確認できた155作家と、これらの作家の作品のうち、3件以上のカタログに含まれた作品、のべ3,163点を対象に、分析を進めた。ここでは、全作家名を列挙することは省略するが、<sup>(26)</sup> この作家群のプロフィールは、表1の通りである。以下では、この分析の結果を要約しておく。

まず、文学、歴史の二分野が蔵書家たちの最大の関心を集めていたことは、この調査でも改めて確認された。作家グループのうち、84人が文学作家(54.5%)、31人(20.1%)が歴史著述家であった。作品数でいえば、文学作品が全体の68.1%、歴史作品が13.1%を占めた。これに対して、神学、法学、自然科学の分野を代表する作家は殆どない。

表 1

分類項目・カテゴリー	作家数	作品点数 (のべ冊数)	分類項目・カテゴリー	作家数	作品点数 (のべ冊数)
文学	84	2150	リアリズム	18	399
古典古代	8	81	自然主義	5	218
ルネサンス	5	104	文学史・文学研究	8	140
バロック	1	18	歴史	31	412
感傷主義	2	26	ウィーン郷土作家	13	184
啓蒙主義	10	155	哲学・教育	8	161
シュトゥム・ウント・ドラング	2	28	地誌・地理学	3	44
古典主義	4	573	国家学・政治学	4	39
ロマン主義	14	230	自然科学	1	1
ビーダーマイヤー	8	165	その他	3	32
青年ドイツ派	7	153	総数	155	3163

ここで特筆すべきことは、ウィーンの風土や風俗を描いた郷土作家への関

心の高さである。サンプルの約半数において「オーストリア誌 (Austriaca)」および「ウィーン誌 (Viennensia)」の分類項目が採られていたこと<sup>(27)</sup>、また、31人の歴史作家のうち、18人がオーストリア史、ウィーン史を専門としていたことも、こうした文脈で理解しなければならない。ここに確認される、郷土に対する強い意識と関心は、市民たちの歴史意識を考える際に、重要な要素であろう。

次に、作家グループ全体としてみれば、ドイツ語圏の作家が圧倒的多数を占め、非ドイツ語圏作家は32人(全体の20.8%)、その作品になるとわずか405(12.8%)を数えるのみであった(表2)。蔵書構成におけるこのような傾向は、ドイツ語圏での知的階層の私蔵書において、18世紀以前はラテン語作品が、またそれ以降はフランス語、イタリア語作品が中心的役割を果たしていた事実と対照的といえる<sup>(28)</sup>。

表 2

原 語	作 家 数	作品点数	翻訳点数	翻訳 (%)
英語	8	107	66	61.7%
フランス語	12	181	60	33.1%
イタリア語	2	18	8	44.4%
スペイン語	1	18	8	44.4%
ラテン語・ギリシャ語 (古典)	8	81	59	72.8%
(総 数)	32	405	201	49.6%

表2は、さらに、当時、ギリシャ・ローマの古典やフランス語作品ですら、原語で読む習慣が後退していたことを示している。とりわけ、古典古代についていえば、作家数、作品数とも比較的少数で、しかも、その作品のうち約70%がドイツ語訳の形で所有されている。この傾向は、蔵書家の殆どがギムナジウム教育を受けていたという事実と関連させるとき、とりわけ興味深いものとなる。すなわち、ギリシャ語・ラテン語を必修科目とし、ラテン語による講義もカリキュラムに組み込まれていた当時のギムナジウム教育、特にそこでの文学講義が、知的市民層の教養の根幹を形成したことは、市民研究にお

いてもしばしば指摘されている。<sup>(29)</sup>しかし、これらの私蔵書の構成をみる限り、ギムナジウムが提供した教養理想は、必ずしもそこに直接的には反映されていない。

一方、表1における古典主義作品の数値は、ギリシャ・ローマの作家に代わって、ゲーテとシラーが、新たに文学的規範としての意味を持ち始めたことを示している。これらの作家が、私蔵書において、他の作家たちの追隨を許さない、特別な位置にあったことは、ゲーテ392、シラー151という作品点数にも明示されている。だが、ワイマール古典派に対する心酔は、ウィーンだけにみられた現象ではなかった。多くのゲルマニストが指摘するように、19世紀後半は、ちょうど、ゲーテ、シラーの二大巨頭に対する評価が、「同時代作家」から、ダンテやシェークスピアと並ぶ「古典的巨匠」へと変化しつつあった時代であった。<sup>(30)</sup>とりわけ、彼らの作品が、自由・博愛、理知主義を掲げたことが、ウィーンだけでなく、ドイツ語圏全域にわたって、市民階層の心を強く捉えた。<sup>(31)</sup>ゲーテとシラーの作品に自らの世界観の具現化を見いだした市民たちは、両作家の熱心な信奉者となり、なかでもシラーに対する人気が一種のカルトを生み出したことは、よく知られている。<sup>(32)</sup>このように、ゲーテ、シラーの絶大な人気は、ウィーンとドイツの読書界の大きな共通点をなしていたのである。

さて、これら155人の「人気作家」の作品点数に着目するとき、その多くが全集・撰集によって占められていることを見落としてはならない。<sup>(33)</sup>作品を個々に吟味して購入する蔵書家は、むしろ少数派であった。例えば、クライストの作品を単品で所有した蔵書家はただ一人にとどまり、また、同時代の人気劇作家、ヘッベルの代表作で、ウィーンのブルク劇場でもしばしば上演された、『ヘローデスとマリヤムネ (Herodes und Mariamne)』や『マグダラのマリア (Maria Magdalene)』でさえ単品では所有されなかった。夥しい数の全集・撰集は、研究対象としての「私蔵書」の問題点を改めて浮き彫りにする。すなわち、蔵書家たちが自らの蔵書に求めたのは、何よりも、

冒頭で触れた「立派な風采」であった。かれらは常に書物が「見られる」ことを意識していたのである。全集・撰集という、書物のモニュメンタルな外観は、「市民的文化の代弁者」という、かれらの自意識を十分に満足させたに違いない。

以上のように、カタログのデータ・ベース化から読み取れる特色のアウトラインを概観した上で、次に、当時の読書界の一般的傾向に照らして、これらの特色をさらに詳細に考察することが必要である。

#### 4. 「市民的読書文化」の独自性

1907年、ウィーンの出版業者フーゴ・ヘラー (Hugo Heller) は、当時の著名人32人を対象に、「良書」に関するアンケート調査を試みた。<sup>(34)</sup>「良書」を10点列挙するという依頼に対して、興味深いことに、多くの回答者が、こうした試みの無意味さを指摘している。例えば、作家ホフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal) は、10点のタイトルを挙げた後で、「しかし、わたしの回答は他人にとって本当に有益なものなのだろうか...というのも、今日のわれわれの精神状況は極度の分裂に陥っており、...個々人の教養は、それぞれ全く違った条件下に置かれているからである」と述べた。<sup>(35)</sup>

このホフマンスタールの見解は、当時の読書の状況が、他人の推薦図書が殆ど意味をなさないほど多様化していたことを示唆している。中世から18世紀にかけて、キリスト教教義や啓蒙主義など、共通の価値観が書物の世界全般を支配していた時代とは異なり、19世紀には、すべての読者層を貫く文化的理想はもはや存在しなかった。

では、このように多様化・細分化していた当時の読書界における「市民的読書文化」の位置価値は、どのようなものであったのか。ここでは、貸本屋、民衆図書館など、様々な読書機関を視野に入れつつ検討を進めたい。

19世紀後半、最も広い読者層を捉えていたのは、指摘するまでもなく貸本

屋であった。荒唐無稽な冒険小説から洒落たサロン風短編まで、あらゆる種類の「娯楽読み物」を提供して、貸本屋は、ウィーンでも絶大な人気を博していた。<sup>(36)</sup> マルティーンは、数量的分析によって、19世紀ウィーンの貸本屋における人気作家リストを算出した。<sup>(37)</sup> このリストとの比較においてまず明らかになることは、私蔵書と貸本屋の人気作家が、全く重複しないことである。カール・マイ (Karl May) やユージェヌ・シユー (Eugène Sue) のような、貸本屋のベスト・セラー作家たちは、市民私蔵書の中には殆ど見当たらない。これら二つの人気作家グループの間には、明らかな「文化的分水嶺」が存在したのである。

貸本屋の「読み物」が、文字を解するすべての人間が享受し得る性質のものであったのに対し、すでに確認した市民たちの「スタンダード」とは、レッシングから同時代のアンツェングルーバーに至るまで、いずれも、ある程度の古典的・人文主義的な知識と教養を理解の前提とするような作家たちであった。こうした「娯楽文学」と「高級文学」との二分化は、実は、「文芸的公共性」が崩壊した18世紀末に始まったものである。書籍市場と読者層が拡大し、一切の倫理的メッセージを持たない、純粋な「娯楽のための読み物」の大量生産が始まったとき、一部の作家と読者のグループは、啓蒙期に文学が担った社会的、道徳的媒体としての役割を放棄し、文学を純粋な芸術として昇華させ、自律化しようとした。<sup>(38)</sup> こうして、ゴードン・クレグ (Gordon A. Craig) の言葉を借りるなら、作家たちは「何を書くか」によって「文士 (Literat)」と「文学作家 (Dichter)」に二分化し、<sup>(39)</sup> ここに、「何を読むか」によって読者もまた二つのグループに別れた。

このことから、市民の私蔵書の中に確認できた文化的傾向とは、まさに「文学作家の読者」としてのアイデンティティであったといつてよい。そして、市民階層の間で最大の人気を誇ったゲーテとシラーは、ドイツ文学史上、初めて「芸術としての文学」を「娯楽としての文学」から切り離し、純化した作家であったことも、看過してはならない。<sup>(40)</sup> 貸本屋や民衆図書館では殆ど

読まれなかった両作家は、広い文学的教養をもつ人々だけが接近し得る、知的エリートステータス・シンボルとしての役割を担っていた。その作品の所有を通じて、蔵書家は自らを「文士の読者」から明確に区別することができたのである。<sup>(41)</sup>

さて、ゲーテやシラーの作品を理解するために必須の教養とは、ギムナジウムで教授された古典的、人文主義的な知識にほかならなかった。これらの知識は、確かに、市民の私蔵書に強い影響力を及ぼしていた。例えば、私蔵書においてとりわけ目立った作家たち、殊にレッシング、クロプシュトックら、啓蒙主義から古典主義にかけての作家は、ギムナジウムにおける修辞学や文学の読本に不可欠の人物であった。<sup>(42)</sup>しかし、その一方で、ギリシャ・ローマの作家が重視されなかったことや、ラテン語作品の数が少数であったことなど、蔵書家たちの「人文主義離れ」を思わせる現象も、すでにくつかり確認された。

この点で、市民の蔵書は、ギリシャ・ローマからイタリア・ルネサンスに至る主要作家の作品を、殆どすべて原語で揃えていた貴族階級の私蔵書とは鮮やかなコントラストをなしている。<sup>(43)</sup>また、貴族と市民の私蔵書が、キケロ、ベトラルカなど一部の作家を共有しながら、一方がこれらをラテン語版で、他方がドイツ語版で所有していたことなどは、両者における人文主義的傾向の微妙な「ずれ」を象徴している。<sup>(44)</sup>

ドイツにおける市民階層の知識、教養に関する理想の流れが、18世紀末から19世紀にかけて、人文主義から歴史主義へと大きく変化したことは、すでに研究史が指摘している。<sup>(45)</sup>それまで哲学や自然科学の理解のための補助学問にすぎなかった歴史学が、ここで、独立した学問分野を形成するものとして、教養の中心に位置するようになった。そして、10件のサンプルに現われた蔵書家たちの歴史に対する強い関心は、この文化史上の変遷と見事に符合している。殆どすべての私蔵書カタログが「歴史」の分類項目を備えていたことを考えあわせても、この時期、一般教養における「歴史」の重要性が増大し

たことは明らかである。

さらに、これらの私蔵書がレッシングやヴィーラントなど、貸本屋や公共図書館では殆ど忘れ去られていた、ドイツ啓蒙主義の作家たちの作品を体系的に収集していた事実も、蔵書家たちの歴史主義的志向として理解できる。すなわち、ここに表れたものは、文学史も含めた歴史的知識を教養の中心と考え、そこに自らの文化的アイデンティティを探ろうとするスタンスにほかならない<sup>(46)</sup>。とりわけレッシングは、「市民による社会的解放と自由な市民社会の確立」をモットーに活動した、ドイツ文学史における最初の「自由な作家 (der freie Schriftsteller)」<sup>(47)</sup>であった。すなわち、市民蔵書家たちは、間違いなく、彼の存在の中に近代市民階層の起源を見ていたのである。

また、蔵書家たちが、ゲーテとシラーに深く傾倒する一方で、その反対勢力とも呼べるロマン主義作家やリアリズム、自然主義の代表作をも広くコレクションに加えていたという事実は、レッシングからゲーテ、シラー、さらにはロマン主義に至る連綿とした文学史の流れ全体を、「ドイツ国民文学の形成過程」とみたゲルヴィーヌス (Georg Gottfried Gervinus) の歴史主義的な文学史観が、市民たちの間にいかに深く根付いていたかを裏付けるものである<sup>(48)</sup>。

この歴史主義的教養理想はドイツ語圏全般に認められたものであったが、しかし、これらの私蔵書をみる限り、ウィーンの歴史主義は、ドイツにおけるそれとはいくぶん性格を異にしていたように思われる。すなわち、ドイツにおいては、歴史主義の流れはドイツ・ナショナリズムと結び付き、ドイツの国民的統合のプロセスに極めて重要な役割を果たした<sup>(49)</sup>。ところが、ウィーンでは、市民階層、特にそのエリート層の多くが、ドイツ語およびドイツ文化にその文化的アイデンティティを見い出していた一方で、彼らの歴史主義的教養理想がドイツ民族主義に直結することは決してなかった。私蔵書においても、その強い歴史主義的傾向にも拘わらず、フリードリヒ・マイネッケ (Friedrich Meinecke) やハインリヒ・トライチュケ (Heinrich von



Treitschke)ら、歴史主義をドイツ民族主義との関連の中で理論化していったドイツの思想家たちの作品は、一点も確認されなかった。こうした傾向の背景には、普禩戦争敗北後、首都ウィーンの市民階層が、ドイツ帝国との一切の政治的コンタクトを失っていた事実を指摘し得る。周知のように、ハプスブルク帝国のドイツ・ナショナリズムは、その後、市民階層の間に支持基盤を構成することはできず、むしろ特殊なラディカリズムの一派となったのである。<sup>(50)</sup>

いずれにしても、これらの私蔵書に現われた歴史主義的傾向は、決して政治的イデオロギーに結びつくものではなかった。それはむしろ、過去の歴史との関わりにおいて現在を生きようとする生活態度であり、歴史的知識によって現在を解釈しようとする文化的スタンスであった。<sup>(51)</sup>すでに確認された、郷土の伝統文化に対する強い関心も、その現れにほかならない。こうしたスタンスは、政治思想の流れよりは、むしろ、しばしば時代錯誤として批判される当時の建築様式や、また歴史画の大ブームなどと関連させて理解すべきものである。

さて、市民の私蔵書が体现した、これらの文化的理想や世界観が、当時の読書界全般に有効な、普遍的価値を持たなかったことはすでに自明である。貴族の私蔵書も、民衆教育を目的とする公共図書館も、全く違う価値基準に従って構築されていた。歴史主義的傾向を例に取るなら、在庫の80%以上を娯楽小説が占めた貸本屋や民衆図書館では、歴史書を扱うことが極めて希だったばかりか、<sup>(52)</sup>19世紀末になると、ウォルター・スコット (Walter Scott) に代表される歴史小説ですら、次第に読まれなくなっていたのである。<sup>(54)</sup>

また、前述の、「良書」に関するアンケートの回答も、市民の私蔵書に表れた読書傾向の特殊性を浮き彫りにしている。すなわち、多くの回答者は、レッシング、ヴィーラントら啓蒙主義の作家たちには全く言及せず、ゲーテやシラーに関してはむしろ文学史上の記念碑的作家としての評価を下す一方で、イプセン、ストリンドバーク、スタンダールなどの同時代作家の作品を「必読書」として熱心に推薦している。<sup>(55)</sup>これらはすべて、シュテファン・ツ

ヴァイク（Stefan Zweig）がその自伝の中で、世紀末ウィーンのギムナジウム生がみな夜を徹して夢中で読み耽ったとして挙げた作家たちである。<sup>(56)</sup>これは、市民階層の私蔵書にみられた、歴史主義に悼さすアナクロニスティックな読書趣味に対して、当時の読書界では、一般に、リアリズムや自然主義を代表する同時代作家たちが国境を超えて広く読まれていたことを示唆するものである。

しかし、現代的な方向性は、市民の私蔵書にも、緩慢ではあるが、確実に表出しつつあった。表1が示すように、蔵書家たちの関心は、確かにリアリズムや自然主義にも向けられていたのである。そして、古典的巨匠と同時代人の共存は、蔵書家の世代差を考慮に入れるとき、さらに新たな視点へと結びつく。すなわち、10人の蔵書家のうち、1848年の三月革命以前にギムナジウムを終えた人々に比べて、若い世代ほど、より多くの同時代作品を所有したことが確認できるからである。<sup>(57)</sup>このことは、市民たちの関心が、時代とともに文学史的作品から現代作品へとシフトしていたことを意味している。

サンプルの数量的分析と、他の読書機関等との比較によって、次第に明らかになった「市民的読書文化」は、このように、19世紀の文化的、精神的潮流そのものを象徴する。すなわち、ここに、様々な精神的・政治的イデオロギーがひしめき合った19世紀末という時代の中で、人文主義的理想、啓蒙主義的伝統から新たな歴史主義的世界観、そしてさらに、ポスト歴史主義としてのリアリズムや自然主義など、ラディカルな現代精神へと揺れ動いた、当時の知的市民層の教養理想の変遷プロセスそのものを読み取ることができるのである。

## 5. おわりに

読書や書物に関する社会史的研究、とりわけ、19世紀の識字率に関するデータは、私蔵書の中に読みとられたこれらの読書傾向を、市民階層全体に有効

な文化的メルクマールとみなす視点を疑わしいものにする。すなわち、19世紀の段階では、書物を享受するために十分な読み書きの能力をもつグループは、まだ殆ど市民層によって占められていたことが指摘されている<sup>(58)</sup>。私蔵書の古典的・歴史主義的な傾向とは対照的な、通俗的・娯楽的な貸本屋の読書文化を支えていた読者もまた、市民階層という、極めて広範なスペクトルをもつ社会グループの一部にほかならなかった。読書文化そのものが著しく多様化するなかで、市民というひとつの社会グループの内部に、純粋に娯楽のための読書から知的ステータスを確認するための書物所有に至るまで、多種多様な読書のパターンとスタイルが存在したのである<sup>(59)</sup>。

では、これらの雑多な読書文化は、市民の日常の中にどのような形で展開していったのか。例えば、同一の人物が様々な「読書スタイル」を同時に実践していたのか、それとも、全く別種の書物を読み、お互いに殆どコンタクトを持たない複数の読者グループが並立的に存在したのか。いずれにせよ、こうした問題に対して正確な史料的裏付けを行うことは、極めて困難である。

これらの「読者の日常」に対して幾分でも光を当てるためには、市民の自伝的史料や書簡、日記などから「読書」・「書物」に関わる記述をピック・アップしていく作業が有効である<sup>(60)</sup>。これらの作業の結果、ここでは、一般化はできないにしても、次のような傾向を確認し得た。すなわち、読者はその成長過程においていくつかの「読書スタイル」を通過するのが普通で、一人の読者が複数の「読書パターン」を共時的に保持するという例はむしろ稀であった。確かに、貸本屋のレパートリーをほぼ独占していた娯楽文学は、教養市民層においてさえ、私蔵書の分析において推論されたよりもずっと強い文化的影響力を持っていた<sup>(61)</sup>。しかし、この影響は多くは人生の一時期に限定されていた。例えば、その教育過程においても、また私蔵書の内容から見ても「古典的読者」の典型と呼べる、ウィーン市長カエタン・フェルダー (Cajetan Felder) のような人物でさえ、幼年期、冒険小説に耽溺した経験を持っていた<sup>(62)</sup>。しかし、多くの読者は、青年期を境にこうした通俗的な読書

パターンを脱し、私蔵書分析で確認されたような作家・作品に親しむようになったのである。そして、多くの事例において、ギムナジウム教育が「読書パターンの転換」の契機となった事実は、とりわけ興味深い<sup>(63)</sup>。ギムナジウムが提供した古典的・人文主義的教養理想が、次第に一義的な文化的規範としての意味を失いつつあったとはいえ、市民階層において未だに強い影響力を持ち続けたことは、否定し得ない。

さらに、これらの私的史料は、市民たちが図書館の所有、あるいは自らの蔵書に対してどのような観念を抱いていたかという問題に対しても、解明の糸口を与えてくれる。すなわち、古書を購入する際に、前所有者が誰であったかを強く意識し、また、本の扉部分などに、前所有者が残したコメントに関連させる形で自らの論評を書き込んだことなど<sup>(64)</sup>、蔵書家たちの様々な行動パターンが明らかになったからである。これらの行為は、自分自身が、作品の成立から後世における議論、批判、評価に至るプロセスに参加しているという意識の現われにほかならない。文化や思想の形成過程に対するこの能動性は、まさに啓蒙期の「文芸的公共性」の名残であり、蔵書家たちにとって書物が市民的教養の象徴であった事実の証左といえる。

また、蔵書家の中には、自らのコレクションについて、少なくともその一部を子孫に受け継がせなければならないと考えた人物もあった。例えばフェルダーは、蔵書とはその所有者が積んだ教養そのものを体現するものであり、自らの教養は、蔵書という形で子孫に継承させるべきだ、と書いている<sup>(65)</sup>。こうした意図は、自分が築いた財産を、分散させることなく子孫に相続させるために、遺言書を綿密に整備した経済市民の行為と同系のものである。すなわち、教養市民層にとっての知識や教養とは、経済市民にとっての資本と同様、子孫によって相続され、再生産されなければならない、そして、私蔵書は、その教養理想のもっとも明確な具現化として引き継がれるべきものであった<sup>(66)</sup>に相違ない。

このように、19世紀になってもなお、教養市民層の間では、私蔵書、ある

いは書物の所有は、特別な社会的機能を果たしていた。それは、知識と教養の中に自らの存在意義を認める人々にとって、重要な自己確認の手段であり続けた。しかし、一方、19世紀末になると、知的職業者においてさえ、図書所有の習慣が廃れつつあったこともまた、紛れもない事実である。例えば、『新ウィーン日報 (Neues Wiener Tagblatt)』の文芸欄担当記者、ジエグムント・シュレジンガー (Siegmund Schlesinger) は、息子の手記によると、一冊も本を所有せず、必要に応じて公の図書館を利用していたという。<sup>(87)</sup>

そして、ここに確認される「私蔵書の衰退」は、「教養市民」という社会グループの異質な構成要素をその根本で結び付けた、独自の教養理想そのものが崩壊し始めていたことを示唆している。学問や知識がますます専門分化するにしたがって、特殊な専門知識を糧として生きる知的職業者のグループもさらに細分化していった。その結果、個々のグループ間の交流やコンタクトはますます希薄になり、やがて、彼等は、知的市民層という大きなグループを繋ぐ共通の教養理想よりも、それぞれの職業生活をレベル・アップする専門知識の中により大きな意義を見出すようになった。20世紀が近づくにつれ、古典的なギムナジウム教育よりもむしろ実践的な職業専門教育が重視された現象は、こうした「知識」に関する価値観変化の現われにほかならない。<sup>(88)</sup>

コッカヤコンツェ (Werner Conze) がその教養市民研究の結論として確認した、新しい「専門家集団」の台頭と伝統的な教養市民層の没落の背景には、このように、実知識に対する教養の価値低下があった。「教養市民層の没落」とは、19世紀末の劇的な社会現象ではなく、18世紀後半から連綿と続く、長期的な文化史的变化のひとつの結果にほかならなかった。すなわち、「文芸的公共性」が崩壊して以降、啓蒙期に市民階層の自己確認の手段として機能した「読書」の伝統が、約一世紀をかけてゆっくりと崩壊していくプロセスである。そして、ここで確認された19世紀市民の私蔵書の特色、とりわけその個性・多様性は、読書文化における市民的伝統の最後の局面を表わすものとみることができる。<sup>(89)</sup>

## 注

- (1) ドイツ、オーストリアにおける研究史については、次の文献を参照のこと。Ute Frevert, Bürgertumsforschung. Ein Projekt am Zentrum für interdisziplinäre Forschung der Universität Bielefeld, in: Jahrbuch der historischen Forschung (1986), S.36 ff.; Dieter Hein, "Stadt und Bürgertum im 19. Jahrhundert". Ein Frankfurter Forschungsprojekt, in: Informationen zur Modernen Stadtgeschichte 1991/1, S. 15ff; 山之内克子「オーストリアにおける近代市民研究—研究プロジェクト『ハプスブルク帝国における近代市民階層』を中心に」、千葉大学『人文研究』第28号(1999年3月), 297-327頁
- (2) Otto Dann, Die Lesegesellschaften und die Herausbildung einer modernen bürgerlichen Gesellschaft in Europa, in: Ders.(Hrsg.), Lesegesellschaften und bürgerliche Emanzipation. Ein europäischer Vergleich, München 1981, S. 9
- (3) Jochen Schulte-Sasse, Das Konzept bürgerlich-literarischer Öffentlichkeit und die historischen Gründe seines Zerfalls, in: Christa Bürger, u. a. (Hrsg.), Aufklärung und literarischen Öffentlichkeit, Frankfurt a. M. 1980, S. 84
- (4) ユルゲン・ハーバーマス, 『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』, 細谷貞雄他訳, 未来社, 1994年, 46-85頁参照。
- (5) Vgl. Schulte-Sasse, a. a. O., S. 97
- (6) Engelsing は, 19世紀のドイツおよびオーストリアに関して, イギリス等に比べて識字率が低かったとしながらも, ニーダー・エスタライヒでは, 1850年代, 新兵のうち少なくとも7割から8割が読み書きができ, また, 1870年代のプロイセンでは, 非識字率が人口の一割強にとどまったというデータを挙げている。Rolf Engelsing, Analphabetentum und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft, Stuttgart 1973, S.97f. こうしたデータが, 実際には読書能力をもたない人々をも計上してしまっている可能性については, Rudolf Schenda らが指摘している。Vgl. Rudolf Schenda, Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoffe 1770-1910, Frankfurt a. M. 1988, S. 49 ff.
- (7) Alberto Martino, Publikumsschichten und Leihbibliotheken, in: H. A. Graser (Hrsg.), Deutsche Literatur. Eine Sozialgeschichte, Bd. 7, Hamburg 1982, S. 69
- (8) Vgl. Engelsing, Die Perioden der Lesergeschichte in der Neuzeit. Das statistische Ausmaß und die soziokulturelle Bedeutung der Lektüre, in: Archiv für Geschichte des Buchwesens, Jg. 1969, S. 962
- (9) Kocka, Bürgertum und Bürgerlichkeit als Probleme der neueren deutschen Geschichte, in: Ders., Bürger und Bürgerlichkeit im 19. Jahrhundert, Göttingen 1987, S. 21ff., bes. S. 24ff.
- (10) Vgl. Kocka, Das europäische Muster und der deutsche Fall, in: Ders. (Hrsg.), Bürgertum im 19. Jahrhundert, Bd. 1, Göttingen 1995, S.14
- (11) 19世紀に市民階層の圧倒的的支持を受けて隆盛を極めた歴史主義建築が, 建物の実利性よりも

- 常にその外観を重視したことは、市民文化のこうした側面を最も端的に示す例といえる。ウィーンの歴史主義建築については、以下の論文を参照のこと。山之内克子「ウィーンの都市拡張計画とその文化史的背景—歴史主義建築再考」、『西洋史論叢』第11号（1986年12月）、58-71頁
- (12) ここでは、以下の5つの条件でフィルタリングを行った。①市民階層への帰属、②所有者の生没年(サンプルの没年を、ほぼ1880年から1920年とする)、③蔵書の規模(総数約2,000から5,000冊の蔵書を選択)、④蔵書の内容(純粋な専門図書コレクションは除外)、⑤カタログの分類法(ある程度の内容的分類がなされていることを条件とする。すなわち、著者名・書名をアルファベット順に並べたものや、本の大きさによって分類したものは除外)
- (13) サンプルとして扱う私蔵書の所有者とカタログは次の通りである。Max Burckhard (法学者・劇作家、1854-1912, Auktionskatalog Bibliothek Max Burckhard, Beilage zur; Wiener Kunst-und Buchschau, Jg. 1912), Gottfried Eissler (美術品収集家、1862-1924, Katalog der Bibliothek Gottfried Eissler, Wien 1925), Cajetan Felder (弁護士・ウィーン市長、1814-1894, Katalog der reichhaltigen Bibliothek des Herrn Dr. Cajetan Frh. v. Felder, Wien 1896), Leopold Neumann (ウィーン大学法学部教授、1811-1888, Verzeichnis der nachgelassenen Büchersammlung des Herrn Dr. Leopold Frh. v. Neumann, Wien 1889), Julius Reich (ガラス製造業者、1859-1922, Katalog der Bibliothek Julius Reich, Wien 1929), Friedrich Schlögl (作家、1821-1892, Versteigerungskatalog der Bibliothek Friedrich Schlögl, Wien 1921), Felix Schwab (木綿紡績工業者、1858-1922, Bücherverzeichnis Felix Schwabs von 1904, Wien 1904), Ludwig Speidel (ジャーナリスト、1830-1906, Bibliothek Ludwig Speidel, Bd. 1-4, Wien o.J.), Alois Spitzer (弁護士、1834-1905, Katalog der reichhaltigen Bibliothek aus dem Nachlass des verstorbenen Dr. Alois Spitzer, Wien 1907), Anton Widter (ビール醸造業者・考古学者、1809-1887, Verzeichnis der wertvollen Büchersammlung aus dem Nachlasse des Herrn Anton Widter, Wien 1890)
- (14) 本稿は、下記の学位論文の一部に加筆・修正を加えたものである。この論文においては、分析データの数値を過大に評価することを避ける手段として、私蔵書の構成内容に関する数量的分析と平行して、サンプルとなった私蔵書の所有者についての伝記的史料を分析し、その「市民的」社会環境を明らかにしようと試みた。Yoshiko Yamanouchi, Bürgerliche Lesekultur im 19. Jahrhundert: Eine sozialgeschichtliche Untersuchung am Beispiel Wiens, Phil. Diss., Wien 1997, S. 15ff.
- (15) Paul Raabe, Gelehrtenbibliothek im Zeitalter der Aufklärung, in: Werner Arnold, u. a. (Hrsg.), Bibliotheken und Aufklärung, Wiesbaden 1988, S. 112
- (16) Vgl. Uwe Jochum, Kleine Bibliotheksgeschichte, Stuttgart 1993, S. 131. S.a.; Reinhard Wittmann, Geschichte des deutschen Buchhandels, München 1991, S. 201 f.; Ders., Buchmarkt und Lektüre im 18. und 19. Jahrhundert. Beiträge zum literarischen Leben 1750-1880, S. 111 ff.
- (17) Vgl. Gerhard Streich, Die Privatbibliothek als Handwerkzeug des Gelehrten im 18. Jahrhundert, dargestellt am Beispiel Göttingens, in: Paul Raabe (Hrsg.), Öffentliche und

- private Bibliotheken im 17. und 18. Jahrhundert. Raritätenkammern, Forschungsinstrumente oder Bildungsstätten?, Bremen/Wolfenbüttel 1977, S 269
- (18) Friedhelm Beckmann, Französische Privatbibliotheken. Untersuchungen zu Literatursystematik und Buchbesitz im 18. Jahrhundert, in: Archiv für Geschichte des Buchwesens Bd. 31, Frankfurt a. M. 1988, S. 20 ff.
- (19) Streich, a.a.O., S. 261 f.
- (20) サンプルにおける分類法および各項目が全体に占める割合 (%) は、以下の通りである。
- Burckhard (総数2,930 ; 図書館学1.9, 雑誌・定期刊行物0.5, 自然科学2.3, 哲学2.5, 美学0.4, 歴史3.4, オーストリア誌6.5, 地理1.2, 文化史1.6, 口承・伝承文学5.4, 音楽0.1, 美術4.4, 文学3.6.1, 文学史10.9, スポーツ1.1, 法学0.6, 反ユダヤ主義0.3, 神学・心霊学4.5, 補遺7.6); Eissler (総数2,108 ; ゲーテ17.5, 19世紀半ばまでのドイツ文学17.7, 過去60年間のドイツ文学21.1, 豪華版・私家版8.7, 美術書19.4, 絵入り本7.0, 音楽2.6, 16・17世紀の古書2.5, その他5.2); Felder (総数1,839 ; 歴史・回想録・伝記・旅行書34.7, オーストリア誌・ウィーン誌11.6, 自然科学・昆虫学9.6, その他<法学・文学・哲学>44.0); Neumann (総数2,003 ; 国家学・法学・政治学・統計学55.2, 歴史・地理10.5, 古典および現代文学・言語学26.8, その他7.5); Reich (総数1,652 ; 美術書45.9, 絵入り本4.0, 音楽・舞踏0.7, 文化史11.5, 旅行3.6, 歴史10.7, 国家学・経済学5.4, 法学・刑法学1.2, 文学7.8, 自然科学・医学1.2); Schlögl (総数2,075 ; Schlögl著作0.9, ウィーン誌20.0, オーストリア誌18.0, ドイツ文学・翻訳文学60.3, 補遺0.7); Schwab (総数2,184 ; 法学・経済学・社会問題1.1, 哲学・教育1.3, 歴史・文化史4.2, 回想録・書簡・伝記4.0, 文学史・言語1.1, 地理・旅行書・天文学3.0, 自然史・数学・物理・化学・医学2.6, 美術・音楽4.2, 15-17世紀の古書1.3, ゲーテ・コレクション18.2, シラー・コレクション5.4, 古典および現代の戯曲と詩歌15.0, 小説18.3, メルヘン・伝承文学2.1, その他3.5, 月刊誌・週刊誌6.4, 外国語の戯曲・詩歌・小説8.9); Speidel (総数2,850 ; 文学作品17.6, 古書2.5, 文献学・書籍出版・図書館3.6, ドイツ文学史25.9, 伝説・メルヘン・諺・神話4.0, 言語学9.9, 1624年以前のドイツ文学5.6, 哲学25.6, 心霊学・神秘学・魔術2.6, 補遺1.6); Spitzer (総数5,430 ; 文学12.0, 文学史1.7, 言語学0.5, 書誌学・書籍装飾0.8, 法学・国家学8.4, 哲学・宗教1.6, 自然科学・地理・旅行4.4, 林業・狩猟・農業・スポーツ2.2, 古代研究・美術史・絵入り本11.9, 演劇・音楽3.3, 歴史4.5, フランス史4.7, 文化史・風俗史8.6, オーストリア誌6.1, 伝記16.4, ヨーゼフ2世研究2.8, ウィーン誌22.4, 歴史・補遺2.5) Widter (総数1,728 ; 歴史・地理47.9, 系譜学・紋章学12.2, 古銭学5.9, 古代研究・美術史18.9, 自然科学7.1, その他8.2, 系図書・紋章鑑集0.5)
- (21) 注24参照。
- (22) Vgl. Charles E. McClelland, Zur Professionalisierung der akademischen Berufe in Deutschland; Claudia Huerkamp, Die preußisch-deutsche Ärzteschaft als Teil des Bildungsbürgertums: Wandel in Lage und Selbstverständnis vom ausgehenden 18. Jahrhundert bis zum Kaiserreich; Vincent Alan Clark, Entstehung und Professionalisierung der Architektenberufe in England und Deutschland im 19. und 20. Jahrhundert; Manfred Späth, Die Professionalisierung von Ingenieuren in Deutschland und Rußland 1800 bis 1914. Alle



- in: Kocka, W. Conze (Hrsg.), *Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert*, Teil I, Stuttgart 1985. なお、ドイツにおける専門家教育に関しては、以下の文献も参照のこと。C.E. マクレランド著、望田幸男監訳、『近代ドイツの専門職』、晃洋書房、1993年；望田幸男編著、『近代ドイツ＝「資格社会」の制度と機能』、名古屋大学出版会、1995年
- (23) サンプルを除く53件の市民私蔵書のうち、少なくとも17件がこのタイプに分類され得た。
- (24) 確認された20件のスタンダード・ワークは、以下の通りである。Arnim u. Brentano, *Knaben Wunderhorn*; J. Aschbach, *Geschichte der Wiener Universität*; Cervantes, *Don Quixote*; W.G. Dunder, *Denkschrift über Wiener Oktober-Revolution*; Eckermann, *Gespräch mit Goethe*; Goethe, *Faust*; Goethe, *Schriften*; Grillparzer, *Sämtliche Werke*; Heine, *Sämtliche Werke*; Keller, *Sieben Legenden*; Körner, *Sämtliche Werke*; T.B. Macaulay, *Geschichte des Englands*; C. Pichler, *Denkwürdigkeiten aus meinem Leben*; *Sachsenspiegel*; Scheffel, *Ekkehard*; A. Springer, *Geschichte Österreichs seit Wiener Frieden*; Swift, *Gullivers travels*; *Tausend und eine Nacht*; C.v. Wurzbach, *Biographisches Lexicon Kaiserthums Österreich*
- (25) Vgl. Streich, a.a.O.
- (26) これらの作家については、以下を参照のこと。Yamanouchi, a.a.O., S. 230ff.
- (27) 注24参照。なお、Widterのカatalogにおいて、これらの分類が、「歴史」の下部細分項目として用いられている。
- (28) Streich, a. a. O., Anlage III. (S. 294 ff.)
- (29) Vgl. Ulrich Muhlack, *Bildung zwischen Neuhumanismus und Historismus*, in: Reinhart Koselleck (Hrsg.), *Bildungsbürgertum*, Teil II, Stuttgart 1987, S. 80 ff. なお、オーストリアに関しては、以下の研究も参照のこと。Georg Jäger, *Zur literarischen Gymnasialbildung in Österreich von der Aufklärung bis zum Vormärz*, in: Herbert Zeman (Hrsg.), *Die Österreichische Literatur. Ihr Profil an der Wende vom 18. zum 19. Jahrhundert (1750-1830)*, Teil 1, Graz 1979, S. 88ff.; Helmut Engelbrecht, *Geschichte des österreichischen Bildungswesens. Erziehung und Unterricht auf dem Boden Österreichs*, Bd. 4, Wien 1986, S. 170 ff.; Helmwart Hierdeis, *Zur Widerspiegelung der Politik in österreichischen Schullesebüchern des 19. Jahrhunderts*, in: Elmar Lechner u.a. (Hrsg.), *Zur Geschichte des österreichischen Bildungswesens*, Wien 1992, S. 471 ff.
- (30) Vgl. Karl Robert Mandelkow, *Die bürgerliche Bildung in der Rezeptionsgeschichte der deutschen Klassik*, in: Koselleck (Hrsg.), a.a.O., S. 183
- (31) A. a. O., S. 190
- (32) Vgl. Rainer Noltenius, *Schiller als Führer und Heiland. Das Schillerfest 1859 als nationaler Traum von der Geburt des zweiten deutschen Kaiserreichs*, in: Dieter Düding u. a. (Hrsg.), *Öffentliche Festkultur. Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg*, Hamburg 1988, S. 237 ff.
- (33) 155人の作家グループのうち、42人について、サンプルにおいて少なくとも3件以上の全集・

- 撰集が確認されたが、このうち37人が文学作家であった。すなわち、文学作家全体のうち44%が、主として全集・撰集の形で所有されていた。Vgl. Yamanouchi, a.a.O., S. 99ff.
- (34) Vom Lesen und von guten Büchern. Eine Rundfrage veranstaltet von der Redaktion der "Neuen Blätter für Literatur und Kunst". 32 Originalbriefe eingeleitet durch einen Brief von Hugo von Hofmannsthal, Wien, 1907
- (35) A. a. O. S. VI.
- (36) ウィーンにおける貸本屋の歴史については、次の文献を参照のこと。Alois Jesinger, Wiener Lekturkabinette, Wien 1928
- (37) Martino, Deutsche Leihbibliothek. Geschichte einer literarischen Institution (1756-1914), Wiesbaden 1992, S. 802 f. und S. 850 ff.
- (38) Schulte-Sasse, a. a. O., S. 109
- (39) Gordon A. Craig, Die Politik der Unpolitischen. Deutsche Schriftsteller und die Macht, München 1993, S. 175
- (40) C. Bürger, Literarischer Markt und Öffentlichkeit, in: Dies. u. a. (Hrsg.), a. a. O., S. 168
- (41) 例えば、ゲーテの読者の排他性は、すでに当時、スタール夫人によって指摘されていた。Zitiert in: Mandelkow, Goethe in Deutschland, Bd. I; 1773-1918, München 1980, S. 69
- (42) Vgl. Jäger, a. a. O., S. 88
- (43) Vgl. Otto Brunner, Adeliges Landleben und Europäischer Geist. Leben und Werk Wolf Helmhardts von Hohberg. 1612-1688, Salzburg 1949, S. 149 ff.; Ders., Österreichische Adelsbibliotheken des 15. bis 18. Jahrhunderts, in: Ders., Neue Wege der Sozialgeschichte, Göttingen 1956, S. 155 ff.
- (44) Siehe: Yamanouchi, a.a.O., S. 105ff.
- (45) Vgl. Manfred Riedel, Bürgerlichkeit und Humanität, in: Rudolf Vierhaus (Hrsg.), Bürger und Bürgerlichkeit in der Aufklärung, Heidelberg 1981, S. 25 ff.
- (46) Vgl. Peter Hans Reill, Aufklärung und Historismus. Bruch oder Kontinuität?, in: Otto Gerhard Oexle u. a. (Hrsg.) Historismus in den Kulturwissenschaften, Köln/Weimar / Wien 1996, S. 51. S. a.; Muhlack, a. a. O., S. 105
- (47) Wilfried Warner, Lessing zwischen Bürgerlichkeit und Gelehrtheit, in: Vierhaus (Hrsg.), a.a.O., S. 167; Werner Rieck, Literaturgesellschaftliche Aspekte der Lessing-Phase in der deutschen Aufklärung, in: Franklin Kopitzsch (Hrsg.), Aufklärung, Absolutismus und Bürgertum in Deutschland, München 1976, S. 393
- (48) Peter Uwe Hohendahl, Literarische Kultur im Zeitalter des Liberalismus, München 1985, S. 171 ff.
- (49) Vgl. Oexle, Meineckes Historismus. Über Kontext und Folgen einer Definition, in: Ders. (Hrsg.), a. a. O., S. 139ff.
- (50) 例えば, Georg Schönerer (1842-1921) の急進的ドイツ・ナショナリズムについては, カー

- ル・E・ショースキー、「新調子の政治—オーストリアのトリオ」、同著、安井琢磨訳、『世紀末ウィーン—政治と文化』、岩波書店、1983年所収、155-170頁参照。
- (51) Friedrich Engel-Janosi, Die Wahrheit der Geschichte. Versuche zur Geschichtsschreibung der Neuzeit, besonders zum Werden des deutschen Historismus, München 1973, S. 41
- (52) Martino, Die deutsche Leihbibliothek und ihr Publikum, in: Ders. (Hrsg.), Literatur in der sozialen Bewegung, Tübingen 1977, S. 19
- (53) 以下の文献に挙げられたデータを参照のこと。Martino, Deutsche Leihbibliothek, S. 820-846; Jäger u. a., Die deutschen Leihbibliotheken zwischen 1860 und 1914/18. Analyse der Funktionskrise und Statistik der Bestände, in: Ders. u. a. (Hrsg.), Zur Sozialgeschichte der deutschen Literatur im 19 Jahrhundert, Teil II., Tübingen 1990 S. 198ff. u. S. 239ff.
- (54) Vgl. Martino, Deutsche Leihbibliothek, S. 846f.. S. a.; Über Lesen einst und jetzt, Neues Wiener Tagblatt, 29. 11. 1897, Morgenblatt S. 3
- (55) Vom Lesen und guten Büchern, S. XI u. S. XV
- (56) Stefan Zweig, Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers, Frankfurt a. M. 1970, S. 55
- (57) Siehe: Yamanouchi, a.a.O., S. 149
- (58) Schenda, a.a.O., S. 456ff.
- (59) 19世紀、市民階層そのものがそのすそ野を広げていく中で、読書文化に限らず、市民文化そのものが、極めて広範なスペクトルをもったことが、すでに指摘されている。Z.B. Ulrike Döcker, "Bürgerlichkeit und Kultur—Bürgerlichkeit als Kultur", in: Ernst Bruckmüller u.a. (Hrsg.), Bürgertum in der Habsburgermonarchie, Bd. 1, Wien/Köln 1990, S. 101  
 なお、蔵書家に関する伝記的分析によって、書物所有の習慣が、市民階層の中でも、主として教養市民層ならびに、大ブルジョア階級の一部を中心に定着していたことが確認された。  
 Yamanouchi, a.a.O., S.63 ff.
- (60) この作業とその結果に関しては、次の箇所を参照のこと。Yamanouchi, a.a.O., S.151ff.
- (61) 例えば、のちに宮廷劇場総監督を勤め、19世紀ウィーンの知識階層において中心的役割を演じた劇作家、Heinrich Laubeですら、その幼年期の文学世界は専ら娯楽小説によって占められ、ギムナジウムに進学するまでは、ゲーテもシラーも、その名前すら知らなかったという。  
 Laube, Erinnerungen, in: Gesammelte Werke, Bd. 40, Leipzig 1875, S. 27
- (62) Felder; Erinnerungen eines Wiener Bürgermeisters (Hrsg. v. Felix Czeike) Wien 1964 S. 18 f.
- (63) サンプルとして用いた蔵書家、FelderとBurckhardのほか、作家で蔵書家でもあったRichard Schaukalにおいても、同様の傾向が確認された。Felder, Erinnerungen, S. 23; Burckhard, Eigenhändig ausgefüllter Fragebogen zur Frage über die Jugendlektüre (Umfrage veranlaßt vom Verein deutscher Mittelschullehrer in Böhmen), undat., Wiener Stadt und Landesbibliothek, Handschriftensammlung, I. N. 113 614; Schaukal, Meine Bücher, in: Deutscher Bibliophilen Kalender für das Jahr 1914, S. 62

- (64) Felder, a.a.O., S. 99 なお、今日、完全な形で残され、クレムスのドナウ大学で整理作業が進行している、Schaukal の私蔵書においては、同様のメモが筆者によって実際に多数確認された。
- (65) Originalmanuskript der Memoiren Cajetan Felders (Wiener Stadt-u. Landesarchiv), Kap. 15, S. 7
- (66) ただし、総数20,000冊を超える私蔵書を代々受け継いだ貴族とは異なり、私蔵書をそのまま子孫に相続させる習慣は、市民階層の中に必ずしも定着してはいなかった。現に、Felder の父親が収集した優れた私蔵書も、その死後、速やかに競売にかけられた。Felder, a.a.O., S. 97
- (67) Moritz Schlesinger, Das verlorene Paradies. Ein improvisiertes Leben in Wien um 1900, Wien 1993, S. 160
- (68) J. Kocka, W. Conze, Einleitung, in: Dies. (Hrsg.), Bildungsbürgertum, Teil I, S. 21ff.
- (69) A.a.O., S. 25f.; S. a.; Konrad H. Jarausch, Die Krise des deutschen Bildungsbürgertums im ersten Drittel des 20. Jahrhunderts, in: Kocka (Hrsg.), Bildungsbürgertum, Teil. IV, S. 180ff.